

船上の メリークリスマス

「一船が来たぞ」
健二は途中、前のめりになつて手を付きそうになりながらも、勢いをつけて駆け上がった。島で一番きつい坂道だつたが、あとに続いた数名の子供たちも、息を切らして健二に追いついた。二メートルはある岩壁をさらによじ登つた。
「でかいな」
健二が崖の上に立つて腕組みする。「世界中を巡つているらしいぞ」「中じゃ、なんでも食べ放題らしい」「すげー金持ちばかりなんだうな」
健二を取り囲んだ子供たちが、真っ白な大型客船を眺めている。
『飛翔』は日本初の大型客船として十年前に登場し、以来世界中を航海していた。しかし、ここ南大東島に来るのは今回が初めてだつた。南大東島には、砂浜がない。すべて切り立つた崖に囲まれた島だ。二年前に、崖をくりぬいて、漁船が入れる港ができた。それまではクレーンで船ごとつり上げていたのだ。
日本の最南西端にある、小さな島だ。台風情報のとき名前を聞くくらいで、こんな南の海に千五百名もの島民が住んでいることなど、だれも知らない。
『飛翔』が来島するというので、島民は一ヶ月も前から、準備に追われた。大型の船は岸壁に着けない。それに島の周囲の海は深くで錨が降ろせないので、ずっとと繋が続けていなければいけない。島とり船の間を島の漁船がピストン輸送して、乗客を上陸させるのだ。
「いいよな、健二は今日、あの船に割つて入つた。」「いいよな、健二は今日、あの船拓也はうらやましそうだ。」「俺は将来、ああいうでかい船の船長になつて、世界中を旅するだ」「ひでーよな、抽選で見学者を決めるなんて」

* * * 拓也は納得がいかない。そこへ
別の子供が走ってくる。
「健一、船の見学者は、はやく校
庭に集まれって、先生が怒つて
ぞ」
「いねえ、彰夫、行くぞ」
二人は岩壁から、勢いよく飛び
降り、坂道を走つて下つた。

「見学者の乗るためのワゴン車が動き出している。二人が大声で騒ぐと、気が付いたらしく、車は止まつた。

「すみません」

一言だけ行って、二人はワゴン車に乗り込んだ。

島には公の交通機関がない。何十年も前に、サトウキビを運ぶためのトロッコ列車が走っていたがいまは校庭の横に保存されているだけだ。今日のように、何百人も観光客が来るとなれば、ありつたけの島の車をバス代わりに使うしかない。そのため今日は島のサトウキビ工場から役場まで、すべて休みとなつた。

島にはみやげになるような物もないし、名所旧跡などもない。もちろんレストランもないのだ。昨日から女性陣は島寿司やら、マグロの甲焼きなどを、作り続けていた。

健二は崖をくりぬいて作られた港を、「秘密基地」と読んでいた岩が動いてそこから、ロケットが出てきそうな雰囲気があつたのだ。ワゴン車が港に着いた。ワゴン車に乗つて、いた子供たちは漁船に乗り込んだ。小学校からは二十名が、船内見学をすることになつている。

「飛翔という船は、三万二千トンもある船で、乗客は五百三十名、乗組員は二百名も乗つているんだ

一人

六人くらいしか乗れない、漁船の中で、先生が説明始めた。しかし、健二は次第に近づいてくる「飛翔」の姿の美しさに見とれていた。こんな大きな物を人間が作れるのが信じ難かった。漁船から飛翔へ乗り移るのが一苦労だった。ちっぽけな漁船は波に揺られて、大きく上下動する。波に押し上げられた瞬間に、「飛翔」からおろされている浮き橋に飛び移らねばならない。

健二はこうやって飛び乗るんだというよう、いとも簡単に飛び移つた。

「すばしつこい奴だ」

漁船と浮き橋を近づけるために太いロープを懸命に引っ張る外国人クルーに、先生は笑顔を振りまいた。

健二は鉄製の階段を上り、船内

「すげー」
思わず大声を出した。大きく吹き抜けになつたロビーを天井まで見上げると、空が見えるではないか。吹き抜けの中心には、大きなクリスマスツリーが飾つてある。「ようこそ、飛翔へ」「白衣制服を着た船長らしき男が

「船長さんですか？」
思わず訊いてしまう。
「はは、違うよ。私はパーサーですよ」
パーサーなどという言葉を聞いたことがなかつた。しかし、わかつたようにうなずいてみせた。
船内はまるで写真で見た東京の遊園地のようだつた。船首にある広いラウンジのソファに座つてみると、なんだか自分が偉くなつたようだつた。
船内に専属のマジシャンがいて、トランプ手品を見せてくれる。何度やつても、タネがわからぬ。トランプの裏から見えたといふのがすべて。刺激的になつて、いざ特殊な奴なんだ」と彰夫は得意げに話す。
「健二はきっと訓練すれば、あんなふうにできるようになるのだろうと思つた。船内で見るものがすべて。刺激的で、大人の世界だつた。時折、垂客らしいお年寄りがいたが、静かに海を眺めている姿が印象的だつた。
「でも、俺は島のほうがないな」彰夫が言うが、それはどこか負け惜しみのようにも聞こえる。
「俺は決めたぜ。やっぱり船長になる」
健一は胸を張つて言った。船を下りるとき、巨大なクリスマスツリーに目をやつた。
「こんなのが島にも欲しいな」見送りに来ていた、丸顔で制服姿の男に聞こえたようだつた。
「島にはないのかい？」
「男が訊いてくる。
「ないです」
「健一は男の威圧感を感じた。
「また来年も来るからね」
男が笑顔になると、急にやさしい顔になつた。
「船から下りてくる途中で、
「健一、あれが船長だぞ。五本線が肩のところにあつただろ。あれは船長の印だ」
階段をおりていく健一に、背後から先生が言つた。
「健一はしまつたというように手打ちした。

米山公啓（よねやまきみひろ）

作家·醫師

2002年、著書がとうとう106冊になりました。
ファンクラブも会員1200名を超えて順調です。
ホームページの日記コーナー、プレゼントコ
ーナーも充実。メルマガも人気!
今年もすてきな年賀状を作りました。御希望
の方はのびのぶ編集長までご連絡ください。
ホームページは
<http://www.nobunaga.jp/>

<http://www1.sphere.ne.jp/yonevone/>



河出夢ムック『ディズニープリンセス』
(河出書房新社)は書店とディズニーパークで発売中。キラキラ表紙に、ティッシュ、手帳、シール、エンピツ、布とてんぐ、ありの付録でvol.2は700円という価格。

というわけで、こんなムツクが発売されました。

結局、六月と十一月に
3～6歳の女の子向けの
ムック『ディズニーピーリングセス』
作りました。まつたくゼロからの
発で、ターゲットや付録を考えた
スタッフを集めたりと大変で作
とはいえ、内容はキラキラお姫さ
や女の子の夢がいっぱい。ムート
の椅子に座り、ティアラをつけた
ま、ワープロに向かつたり、付録
補のマニキュアを塗つてみたり、
りえをしたり…。スタッフの女の
達（自称：プリンセスチーム）と
ヤーキャーいしながら、楽しく作
ました。おかげさまで、完璧な1冊
！多めに届いた2号目も書店の売
り上げ4位に入り、「王様のブラン
チ」に紹介されたりと嬉しい悲鳴
あげています。次の付録は何にし
うかなと街をうろうろさまよつ
ます。お子さんのいらっしゃる方
ぜひよいアイデアがあつたら教え
ください。勇気が育つナイスな本です！

A photograph of a white dog, possibly a Samoyed or similar breed, standing on a gravel surface. The dog is facing slightly to the right, with its head turned towards the camera. It has a thick, white coat and a bushy tail. The background is dark and out of focus.

2002年 お犬さま ナイスショット ベスト4

A black and white photograph of a massive cruise ship with multiple decks and a prominent funnel, sailing on a calm sea under a clear sky.

ルのケースに犬がたくさん入れ壳られていた。ちょっぴりグ
た犬もいたが、み、みんなペ
て買うんだよね（涙）？

2000年、「一緒に仕事をしてくださった皆様、いろいろお世話になりました。大変なこともたくさんありましたが、おかげさまで充実した時間と仕事をできました。今年も引き続きどうぞよろしくお願ひします!つらくても鼻歌を歌いながら一緒に働きましょう!

仕事以外のお友達にはほとんど会えない1年間でしたが、今年こそはのびのぶ編集長、あなたのおうちに登場しますわよ。2003年が皆さんにとってすてきな年になりますように!

A photograph of a woman from the waist up. She is wearing a red dress with a white lace collar and a white belt. She is holding a large, light-colored teddy bear. The background is a plain, light-colored wall.

番外編：西表ヤマネコ
「ヤマネコに注意！」「スピード
コ守ろう」などと威勢のいい機
樂しみにゆっくり車を走らせ
人でもヤマネコちゃんにお会
とのこと…。しかたがないの
で剥製になったヤマネコを激